

学術変革領域研究（仮称）（B）の位置付けについて（案）

（6月25日開催の研究費部会での委員からの主な御意見）

- 学術変革領域研究（B）を作った趣旨（フイージビリティ研究）を踏まえると、領域代表者は45歳以下の研究者、と年齢制限を設けることはおかしい。
- （本来は年齢等で制限を設けるのは好ましくないが）領域代表者を45歳以下の研究者とするのであれば、学術変革領域研究（B）については「若手のプログラム」と位置付け、国の方針にのっとり政策として若手研究者の育成を推進するものであることを明確にすべきである。

（上記の御意見を踏まえ検討した、科研費改革に関する作業部会における要点）

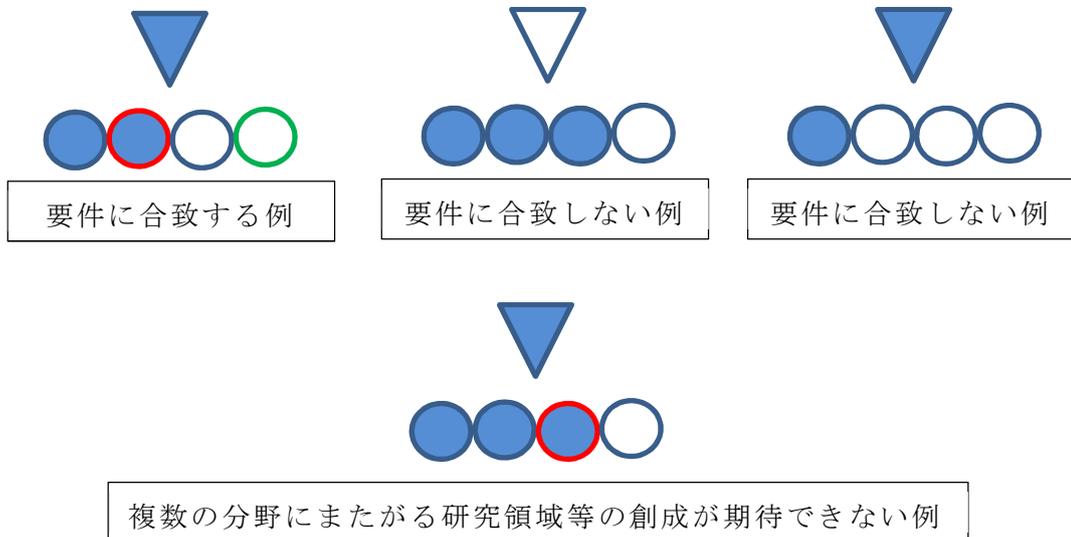
- ピアレビューにより採否が決定される科研費制度において、「年齢」を応募要件とすることは、原則、適当ではない（例外は、研究者としての登竜門的な位置付けにある「若手研究」）。一方で、現在の日本におけるアカデミアの弱体化を改善し、日本の国際的な存在感や貢献度を高めるためには、中期的な視点に立ち、研究人材の育成を政策的に推進する視点も重要である。
- また、「フイージビリティ研究」であれば、既存の挑戦的研究や基盤研究において実施することも可能であるため、新たに設ける学術変革領域研究（B）の位置付けについては、グループ研究で実施する「より挑戦的かつ萌芽的なトランスフォーマティブ研究」である点を明確にすべきである。
- そのため、学術変革領域研究（A）への展開を期待し、中期的な視点に立ち、10年後の新興・融合領域の展開に向けた、挑戦的・萌芽的な研究領域を発展させる研究活動を通じ、次代の学術の担い手となる研究者（45歳以下の研究者）をエンカレッジするとともに、新たな領域を創成し、マネジメントする能力の育成を図ることに着目した「若手支援」を、政策対応として科研費に設けることが適当ではないか。

(案1)

- 学術変革領域研究（A）への展開を期待し、中期的な展開を見据えた、より挑戦的、萌芽的な研究領域への支援を目的とする。
- 次代の学術の担い手となる研究者（45歳以下の研究者）をエンカレッジするとともに、新たな領域をマネジメントする能力の育成を図ることを目的とする「若手支援」として位置付ける。
- 領域代表者に要件を設け、次代の学術の担い手となる研究者とする。
- グループ研究として様々な視点から新たな学術の変革を目指す本種目の目的・性格に照らし、次代の学術の担い手となる研究者を研究代表者とする計画研究（総括班を除く）を複数含む構成とする。
- 計画研究（計画研究代表者）の過半数が同一の研究室等に所属する研究者で占められるなど、複数の分野にまたがる研究領域や革新的な学術研究の創成が期待できないような領域構成ではないことを審査において確認する。（「審査に当たっての着目点」として、審査要綱に明記する。）

【領域構成のイメージ】

▽：領域代表者 ○：計画研究代表者



※1 青色の塗りつぶしは、「45歳以下の研究者」

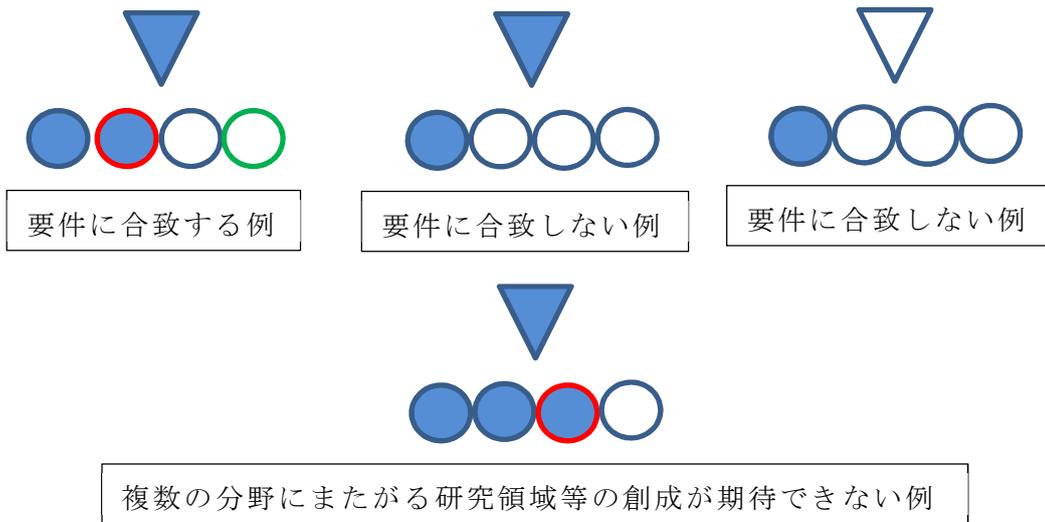
※2 枠線の色が同じ場合は、「同一の研究室等」

(案2)

- 学術変革領域研究（A）への展開を期待し、中期的な展開を見据えた、より挑戦的、萌芽的な研究領域への支援を目的とする。
- **領域代表者に要件を設けない。**
- グループ研究として様々な視点から新たな学術の変革を目指す本種目の目的・性格に照らし、次代の学術の担い手となる研究者（45歳以下）を研究代表者とする計画研究（総括班を除く）を複数含む構成とする。
- 計画研究（計画研究代表者）の過半数が同一の研究室等に所属する研究者で占められるなど、複数の分野にまたがる研究領域や革新的な学術研究の創成が期待できないような領域構成ではないことを審査において確認する。（「審査に当たっての着目点」として、審査要綱に明記する。）

【領域構成のイメージ】

▽：領域代表者 ○：計画研究代表者



※1 青色の塗りつぶしは、「45歳以下の研究者」

※2 枠線の色が同じ場合は、「同一の研究室等」